

自立的な園内研修の支援方法の開発

松永 静子・汐見 稔幸・金田 利子・村上 博文
保坂 佳一・村上 八千世・井上 恵子

1. はじめに

保育指針が改定・告示化され、保育者の専門性の向上のために職場内で研修を積極的にすすめることが保育園の施設長の責務となっている。しかし保育の長時間化により、シフト勤務回数が増す状況の常態化がすすみ、より充実した研修を展開することは大変困難な現状がある。そこで園内研修の取り組みを職場内で自立的に行うことを支援する方法について検討し、今回は映像媒体を作成することを試みたいと考えている。この映像媒体は、保育者が課題を持って実践し、実践を振り返り、職場内で話し合いをすすめる、その議論が次第に活性化し、課題を克服していくプロセス、あるいは実践の振り返りまで到達しない事例、振り返るが話し合いもすすまない場合のプロセスなども映像記録し、事例ごとに分析し、研修事例としてまとめ、いくつかの研修のポイントとなる点を抽出したものとして作成する。具体的には映像（DVD）と解説文書を同時に作成していく。現場で活用されるビジュアルな研修の支援体制の確立を目指していく。

2. 研究方法

2009年度は園内研修に取り組んでいる保育園を調査対象として、各園内研修にオブザーバーとして参加し、内容を映像および記録により調査データの収集を行う。

2010年度以降は事例ごとに分析する。必要に応じ、新たな調査対象の園で観察・記録し、事例を収集していく。事例収集については2010年までとする。

2011年度は映像を編集し、解説書を作成する。試行的にいくつかの保育園に配布し、実際に活用しその結果修正箇所などがあれば修正し、自立的な研修の事例集として映像媒体を完成する。

3. 調査対象

調査対象は保育所（私立（認可：法人立企業立）とする。

- 保育園（大阪府） I 保育園（京都府）
- A 保育園（東京都 K 区）
- B 保育園（東京都 N 区）
- W 保育園（東京都 A 市）
- 保育園・T 保育園（神奈川県 Y 市）
- K 保育園（神奈川県 K 市）

4. 調査時期

2009年6月より開始 2010年3月までとする。

5. 調査内容

自立的な交流型の研修事例：乳児保育室の環境を研修のテーマにしている。

まず本研究の調査者が各保育園の乳児の保育室の環境（保育の様子も含まれる）を映像で記録する。

この事例の対象の保育園は O 園・T 園（Y 市）K 園（K 市）の3園である。

2009年8月より、3つの保育園の1歳児の保育室の環境を撮影し、その映像を互いの園で交換して視聴する。その視聴結果をもとにその園と相手園で意見交換を行う。意見は記録で伝え、記録で返答する。最終的に意見を

もとに自園の環境の工夫に参考にしていく。
保育記録をテーマにした研修事例：園・B園
保育の実践の映像を活用した研修事例：A園・W園
オブザーバーが関与する研修事例：O園（大阪）*2009年10月一時研究を中止した。

6. 調査結果

自立的な交流型の研修事例の結果

K園：乳児保育室の環境についての園内研修は3年目である。1年目には広い保育室で保育者が玩具を中央に出して遊ぶ方法であったが、映像を通して自らの保育を振り返り、気づきを変化につなげ保育室の環境を大きく変化させていた。2年目は、年度当初から環境作りへの意欲や目的を具体的に述べ、環境構成の取り組みの成果を保育につなげていた。3年目は保育形態の検討、発達に応じて環境を変化させるなど、さらに積極的に取り組んでいる。

O園：昨年から調査に加わった保育園。今年度の担任の保育者は初めての交流型の研修の参加となり、自園の視聴も始めてであった。現状の環境や保育について特に問題意識は持っていない、とのことであった。

T園：今年度始めて交流型研修に参加した園。本研究に入る以前より保育環境、玩具などに関心を持ち、園内研修で外部講師からアドバイスを受け工夫をしている園。今回はさらに環境を見直そうと園長・職員の積極的な姿勢をもって参加した。

交流の結果：

T園へは工夫されていて落ち着いて遊んでいる、しかし保育室内に保護者が出入りするこ

と、動的なスペースがないことについての指摘があった。

O園については保育者が決まった玩具だけを出して遊ぶことについて、自分で選べないことに子どもが慣れているのでは？全体に静かで落ち着いているが、それでよいのか？という意見が出ていた。

K園へはコーナーの遊びを見ていくために職員の連携をどうとっているのか、おやつの後片付けのために、コーナーに子どもを集めて待たされているように見える、遊び始めはいいが、後半は飽きて子どもの行き来が多くなるがどうなのか

など、それぞれの園への指摘があり、その後各園の環境について、話し合いと検討がされている。今後も経過を見ていく。

保育記録をテーマにした研修事例の結果

B園：開設されて2年目の企業立の園。

保育指針が改定され、養護と教育の一体化について、保育士はどのようにとらえているのかを明らかにしていく必要があると考え研修を始めた。具体的には保育日誌を保育士全員が読み合い、保育記録をもとに互いの養護と教育のとらえ方を知り、話し合いながら、保育実践を振り返る。

I園：7年前より保育士に日々の保育の中で心に残る場面を、保育の振り返りと子どもへの理解を深めるものとして、記録し、記録をもとに話し合いを行っている。

保育士は一年間に最低1回でも記録をし、2週間に1回行われる話し合いに参加する。

話し合いと説明されるが、意味合いとしてはそれぞれが感想や保育士自身の思いの語り合いの場として行われている。

映像を活用した事例

A園：子どもの主体性を伸ばす保育を探求する、というテーマで、対象児（気になる子）をしばり、話し合う研修。対象児の様子を撮影し、全体で視聴後話し合う。その際に担任保育士が話し合っほしい場面のシーンを取り出し、コマ送りにして、映像の写真を印刷した資料を作成する。クラスごとに分かれてその資料に書き込みをしながら話し合う。話し合った内容を発表しあう。

W園：幼児クラスの園庭での遊びの見直しが研修のテーマである。2009年12月長年、園庭の中央に設置していた古い大型木製遊具を撤去した。2010年2月末に新大型遊具を設置したが、撤去前、撤去後、再設置までの期間に、園庭の子どもの遊び全体をビデオ撮影し、視聴し、現在の園庭遊びの課題を検討し、話し合う。すでに1回目の研修を行った。

6. 考察

自立的な交流型の研修事例

2008年度は2園の交流として行ったが、2009年度から3園にしたことでは、映像から意見を述べる際に、新たな視点が加わり、互いの関係が対立する関係にならずに、意見交換ができていた。しかし、3園分の視聴と話し合いの時間が増えたことで、時間的な調整がつかずに1回の意見交換が限界であった。今後この方法をすすめる際の有用性を具体的に検討する必要がある、園からの保育者の意見を質問調査でを継続している。

保育の記録をテーマにした事例

園長のリーダーシップで行われている。

保育実践を記録する意味、保育記録の重要性について、I園・B園ともに研修を行う前提として理解され、研修が行われている。

保育の基本方針、保育課程との整合性などが話

し合いの中心となり、園としての方向性、保育理念にかかわり、最終的に園長の考え方で研修をまとめている。

映像を活用した事例

A園は当初実践記録を主題に行う目的で研修をすすめていたが、実践の場面を共通理解しやすい映像を活用する研修に変更した。その結果、話し合いが活性化し、研修効果が高まった。さらに「子どもの内面を読む」というサブテーマを設定し、現在、撮影場面や方法を検討しているとのことである。研修の実態は保育者の話し合いを中心に行われている。園長の助言やまとめはしていない。

W園は園庭の遊びがテーマであるが、遊びの内容そのものではなく、園庭での幼児の行動の傾向を把握したいというねらいで、映像を撮影している。撮影した映像を全員で見て、子どもの行動を話し合い、各自で理解を深め、その理解を基に、今後は遊びの内容の研修にシフトしていく方向性を持っている。保育者中心の活発な話し合いがなされる研修である。

現在までのまとめ

本研究は、現在も調査を継続している。自立的な園内研修として、外部講師に依頼せずに保育の実践を見直し、保育の質を向上させていくことは、短期間では困難である。2年間という期間を設定しているが、順調な経過をたどる園もあれば、紆余曲折する園もあり、長期的なスパンで事例をまとめていく研究であることはいうまでもない。最終的には2010年度から2011年度にかけて、結果をまとめ、事例集を完成させる予定である。そのため今年度については中間報告として、まとめた。